インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。

勸學勤息上人

石橋誠通

苗にして秀でざるものあり、秀でゝ實らざるものありといふ語があるが、本途に美菓を結ぶといふことはなか〳〵容易の事ではない。如何に頭がよい學才があるといつても、本途に立派なものになるといふことはなか〳〵困難の事である。村上博士も

よく申された、どんなに智慧があつても才があつても命が長くないと、とても立派な仕事は出來ぬと。それは實にその通りだ、だから昔から成功した人は人知れぬ苦心と、堪耐と努力が必要であるのみならず。命が長くなくてはならぬ、其外種々の原因が其の中に潜んで居るといふことに大に注意しなければならぬ。先生は實に不撓不掘の性格を具へた人であつた。才子といわんよりも寧ろ努力の人であつた。機會に投ずるといふよりも寧ろ已れの意志のまゝにどこまでも徹底的に貫ぬこふとした人であつた。それが往々人の人氣を損じたり、人から敬遠せらるゝといふ樣なことになつて來た。先生が晩年に殆んど人から忘れられた樣であつたのも、餘りに人に他賴る心の少なかつた爲めであらふ。然しながら宗學界に於ける近來の偉人碩匠であつた事は恐くは誰れ一人此れを否むものはあるまい。人が生れてから死に至るまで永い久しい間に於て、一點の非難のないといふ人は恐くは一人もあるまいと思ふ、功罪相償ふ人はそれで普通である。功多くして罪少なきものは勝れた人である。大なる功を殘した人は是れは卽ち偉人である。先生の生涯は高潔といふ二字が、最もよく其性格を顯して居ると思ふ。政治に頭を突き込んで、權勢そいふ或物を得やふと思ふ野心もなく、蓄財に心を奪はれて、耻を耻とも思はぬ貪欲もない買ふて呉れても呉れなくても、コ

ツリコツリと古の道を尋ね、古今の聖賢と思想を交へて、其の本領が何處にあるかといふことを、探り究めんとする。謂ゆる猛進の篤學者であつた。人は或は餘りに時世を解する智識が少なかつたと非難するかも知れぬ。然しながら誰れしも皆な斯くあれと勸めるのではない。然し亦た斯る人も必要である。天台の三大部の記を著した寶池房證眞は、其の記を作る爲に叡山に籠つて、源平の戰を知らなかつたといふことである。實際大なる著述を著はし、幽玄の理に達するには、餘りに小才のきくものは、却つて六かしいかも知れぬ。兎も角先生は、讀書と講義との外には、眼中に何物もなかつた樣だ。懇々學徒を導き、縷々教理を傳ふるは、唯一の樂しみであつた樣に見へた。先生が教授を辭せられた病の原因は、佛教專門學校で、天台四教儀を講釋しつゝあられた際、四教儀の中に或る難問題に逢着して、其れを解決せんものと。餘りに努力された結果、大に頭腦を痛められたにあると聞いて居る。勿論もとよりやゝ持病があつて、それが自然に咽喉や頭まで侵し、痰が喉にからみ付いたから絶へず昆布湯を用ひられたといふ事だから、勿論少しは下地はあつたではあらふが、此問題が大に病を促した事は疑ひない。

◎

先生は尾張國丹羽郡榮村字熊野、鈴木武兵衞の二男として嘉永元年八月九日に誕生された。安政三四年の頃、伊勢の松坂の淸光寺の僧となられたが、幾程もなく師僧に死なれ、又間もなくて兄弟子に死なれたので、一たび實家へ歸へられたが、矢張佛緣が深かつたと見へて、安政五年十一歳の時、飛彈の高山の大雄寺の義譽諦仁上人に就て出家し、慶應二年十九歳で、東京芝の增上寺で兩脉を傳へ、次で大學林で宗乘及び天台部幷に普通學を研究された。明治元年四月から、京都智積院の弘現僧正に就て唯識因明等を研究する爲に、每日伏見から通學された。當時先生が、東京から始めて京都へ來られた時は暫く寺町の永養寺に滯在されたが、其後鳥羽の法傳寺の紹介で、伏見の西運寺に住職された。此の頃の先生の態度は學問の外には何物もなく、學問に夢中であつたので、丁度村上專精博士が、三河の御油の附近の或寺に住職されても、餘りに寺の事を構はれず、掃除さへも行屆かぬので、遂に檀家の不歸依を受けて、東京の方へ赴かれた話の樣に、先生もお寺の事は一向世話をなさらなかつたので、檀家の或る者は、隨分不平を言ふたげなといふ事も聞いて居る。其當時の事である。先生が伏見から智積院へ通學の途中いつも行く行く讀書されたので、牛に蹴散されなさつた事さへあつた。明治二年の頃から、知恩院の學天僧正及び知恩院の門跡師範職大雲講師に就て、宗

乘及び唯識等を研究された。明治三年から知恩院の勸學所で、泉谷の湛忍和上及び雷雨律師に從つて、宗乘及び天台、倶舍、起信等の奥義を研究された。當時は維新の前後であつて我宗の宗政及び教學は、混亂極まつた有樣である。德川時代の教學は、東京の增上寺を中心として、十八檀林で其の職を握つてゐたが、維新と同時に、秩序が全く亂れかけて、一時混亂の狀態となり、明治元年七月始て增上寺に興學所を置き、明治三年始て知恩院に勸學所を設けたのだ。此時勸學所の講師としては、洛西泉谷西壽寺の湛忍和上、及び勤息先生の師匠の雷雨律師が赴任された。而して先生は、この勸學所で宗乘、天台、倶舍、起信等を研究された。

◎

こゝで序手に湛忍和上と雷雨律師の事を一言して置きたいと思ふ。湛忍和上は名古屋の笹總といふて名高い、岡谷惣助といふ豪商の長男であつた。元來其家を相續すべき筈であつたが如何なる因緣であつたらふ、遂に三河の貞照院へ來て慧頓和上といふ人の弟子となられた此の慧頓和上は若い時代、大阪の阿彌陀が池和光寺にゐられた頃、德本上人の感化を受けて、痛く前非を悔ひ改め熱心な念佛者となられた道心者であつたが、其後貞照院に住職し貞照院から京都泉谷西壽寺へ退いて、念佛を勵ま

れた人である。此の慧頓和上が、西壽寺へ退かるゝ時に彼の湛忍和上も隨侍して來られたのである。湛忍和上は長男ではあるし、家が富豪である所から、両親から常に少からぬ物を貢いで、餘裕ある生活を送られた。湛忍和上の弟子には吹原賢良といふ人があつて、これも名古屋の富商の子息であつたが此人は隨分豪傑肌の人であつた。頭も隨分よかつたので小室の宮さんが此の人を見込んで、外國へ留學をなさいと勸められた。賢良和尙は快く承諾し、いよ〳〵出發せんとして東京までは往かれたが不幸赤痢に冒されて、大志を懷いて死んでしまわれた。賢良和尙の外に白旗辨光師と深見志運師との二人の弟子があつた。白旗師は後に岐阜の本誓寺の住職となり、知恩院の執事となり、後に越前の西福寺に住職され、深見師は後に三河の岡崎の昌光寺に住職された。

◎

雷雨律師の事を述ぶる前に、律師の師匠の德住上人の事をこゝに一言しなければならぬ。德住上人は、彼の有名な德本上人の弟子である。數多き德本上人の弟子の中でも、德住上人は最も勝れた人であつた。此人は三河人で、同國荒井山九品院の開山で、最も熱烈なる信仰をもつて居られたが、信仰が熱烈である丈それ丈また感化の力も强

く、其の範圍も廣かつた。德住上人の感化力は三河尾張に多かつたが、又京都にも隨分多くあつたらしい。曾て德住上人が、京都粟田の定信院で、盛んに念佛を弘められた頃雷雨律師が天台を捨てゝ德住上人の弟子となられたのである。サテ雷雨律師は、播州揖東郡北横内村、田淵彦左衞門の二男で、家は古からの財産家であつたが、若い時に出家して、叡山安樂律院の人となり、其の名を眞相と稱へたのである。元來律師は、明晰な頭腦の所有者であり、また熱心な求學者であつたから、叡山安樂律院の中で、名高い天台學者であつた。サテ此の人がナゼ轉宗せられたか、其邊はよくも解らぬが、何か感じた事があつて、飄然安樂律院を背にして、粟田の定信院へ向はれた事は事實である。而して定信院の玄關に立ち、德住上人に拜謁を求め、上人の懇切なる勸化に依て、心は忽ち一變した。そこで直ちに、自分が今まで身を寄せた天台宗をふり捨てゝ、淨土宗の人となり、上人の弟子とならんと願はれたが、上人は再三斷はられた。然しながら上人も、律師の動かし難き決心と、懇切なる願とを否み難く、止むなくそれを許された。此れは實に律師に取つては、一大革命の日であつたに違ひない。生涯記念すべき日であつた事は言ふまでもない。所が其の日が非常に雷雨の烈しい日であつたから、此の意義深き佳日をば、生涯記念せんが爲めに、本の眞相といふ名を改め、雷雨と自稱されたとい

ふことである。所が德住上人の弟子に神阿和尙といふ人がある。此の人は德住上人の甥であり、後に京都寺町聖光寺の住職となつた人であるが、至つて豪の者であつた。曾て鳥尾得菴といふ中將と、さんざん議論した揚句、和尙はエライ腹を立てられて、中將の前でお尻をまくつて、クッ！此尻を喰らへと差し出されたのには、中將も大に閉口して、イヤドウモ豪傑(尻)ダナアと言はれたといふことだ。そんな豪傑肌の和尙であるから、隨分思い切つた事をやつたに違いない。其の故であうふ、神阿和尙と雷雨律師とは、同じ德住上人の弟子として、俱に定信院に居られても、常になかが惡るかつたと聞いて居る。

◎

其後雷雨律師は、芝の增上寺の淨嚴大僧正の招に應じて、增上寺で天台の講演をされた。門弟もなか〳〵多かつた。故知恩院門主野上運海大僧正も其の門弟の一人であつたと聞き傳へた。丁度其頃安樂律院の慧澂和上も、東京上野の淨名院で大に天台の講筵を張つて居られたので、其の門に馳せ集つたものが甚だ多く、芝と上野と両々相對して、天台の花が咲き亂れたといふ譯であつた。彼の有名な福田行誡上人は、慧澂和上に就て、天台を研究された人ださうだ。然しながら雷雨律師は、其後三箇年を經て、ひ

とまづ天台の講を終へ、山城の高麗村の阿彌陀寺へ隱遁して、餘裕ある閑靜な淸き生活を送られた。卽ち淨業の暇には、書齊に籠つて讀書に耽り、或は靜かに阿字觀を修し、或は暖かな春の宵、或は冷しい秋の夕は、庭前の芝生に獨り坐つて、靜かに月輪觀を修行されたといふことである。唯だ机の上の議論ばかりでなしに、幽玄な思想の本途の研究は、斯る淸寂な默想に依らなければ、到底眞味を味ひ得ることは出來ないであらふ。兎もあれ律師が、斯る世離れた、閑寂な、默想的な生活を樂まれたのは、最も幸多きことであつた。話がだん〳〵餘談になつて、なにやら譯が解らぬ樣になつたが、これからいよ〳〵雷雨律師と勤息上人との關係の顚末にうつりたいと思ふ。

◎

前にも申した通り、明治三年始て知恩院に勸學所が開かれたが、其の講師は誰れを賴むがよからふかと、色々と詮議物色の末、倶舍唯識は彼の泉谷の湛忍和上が最も適當の人であらふ。天台は雷雨律師より外に、講師と仰ぐべき人はないといふので、律師を請待することに衆議一致してしまつた。そこで律師を請待に往くには、勤息先生と廣安眞隨上人との二人が、最も適當であるといふので其の任に當ることになつた。ところが今とは大に違つて、汽車や車のない頃とて、二人は草鞋に脚絆の出立で、山城の

陀彌陀寺へ向はれたが、夕陽の西に沈む頃、漸く阿彌陀寺へ着された。隨分苦しかつたであらふ。二人ともホッとせられたであらふ。兎も角徐ろに草鞋を解いて、丁寧に律師に挨拶されたが、律師は不意の旅僧たち何事やらんと思はれたらふ。怪しからぬといふ顏付で、お前たちは何の御用事で私の處へ來たのかと尋ねられた。両師は謹み深く而も丁重に、委しく來意を物語られた。聞いて律師はほゝ笑みして、あゝそうか、一乘の妙法は因緣なくては聽くことは出來ぬが然しお前たちはよく來て呉れたまあ今晩は宿つて呉れ、然しながら氣の毒だが、お前たちは今から御飯を炊いて呉れぬかと言はれたので、(外の者が不在であつたと見へる其れには両師も大分閉口されたそうだ。サテ今律師が、一乘の妙法は因緣なくては聞くことは出來ぬと申されたのは、深い意味のある言で、昔し天台智者大師が、南岳大師の高德を慕ふて、二十二歳の時、光州の大蘇山に南岳大師を尋ね得て、始て拜謁された時に、南岳大師は莞爾として、昔日靈山に在つて同く法華を聽く、宿緣の追ふ所今復た來るかと言ふて喜ばれた言と同意味である。卽ち南岳は天台に向つて、私は昔し釋尊の存世に、お前と與に靈鷲山で、俱に釋尊から法華經を聽いた。然し其因緣がいよ〳〵濃厚となつて、今復た來つて私に法華の教義を聽きたいと思ふのであるが、其れは實に互に喜ばしい事であるといふて、并

常に喜ばれた言である。サテ両師は仰に從ひ、其夜は其處で宿めて貰ふことにして、夕飯の支度に取りかゝられた。卽ち一人は急いで米を洗らふ。一人はあはてゝ芋を洗ふ。火を燒く、茶碗を洗ふといふ始末で、さながら一場の喜劇であつた所が両師も慣れぬ事とて、折惡く御飯が出來損ふた。二人は大に困られた。雷雨律師は其處で一喝、お前らの御飯の炊き方は、法相に適つて居らぬから困る、今もう一度御飯を炊き直して呉れと叱かられたのには、両人もほと〳〵困つてしまつて、どうしやうかと思ふたと、勤息上人も申された。然し律師の言はれた言が、どこまでも昔の學者式で、法相に適はぬと言はれたのは面白い味があるではないか、倶舍唯識の法相を、飯を炊くまで應用したのは、昔の學者の面白味だ。サテ両師も仕方がないから、疲れた足を曳きづりながら、又もや米を洗ひ始めて、再び御飯を炊き直されたが、誠に工合よく出來て、律師も今度は上機嫌皆な打ち揃ふて、樂しく晩餐を終られた。而して其夜は、話に實が入つて夜を更かし、明けの日辭して歸らるゝ前に、壽司など作つて饗應し辨當などにもして下さつたといふことだ。間もなく律師は知恩院の東の一心院へお越しになり、毎日勸學所で講義をなさつたが、遂に一心院の住職となつて、明治十二年四月七日、一心院で遷化された。

◎

斯くて勤息上人は、律師の後を承け繼いで、一心院の住職となり、律師の書物は悉く上人が之れを讓り受けられた。然しながら惜しい事には、雷雨律師が多年苦心して手譯された法華玄義は、他人の爲めに盜まれて、見出すことの出來なかつたのはいかにも殘念であると上人自ら語られた。止觀は言ふまでもなく雷雨上人の手譯本であることは確かである。而して勤息上人は、明治九年に西部大學林の、宗乘專門部を卒業せられ、十一年から泉涌寺の旭雅和上の講席に列つて、倶舍唯識を復習された。十二年十二月には內務省から大講義に列せられ、十七年八月には更らに大政官から權少敎正に補任せられ、此の年又東京小石川傳通院の貫主となり、二十六年には淨土宗學本校の敎授、かつ敎頭の職を兼ねられた。二十九年には宗務所の學監となり、三十一年には專門學院の敎授となり、三十六年には大學林の講師となられた。其の間に於て、多くは京都東山通二條角大恩寺の自坊に住して、研究に餘念もなかつたが、其後病に依て職を辭し、寺務を悉く其の弟子岡地義門師に委ね、自ら新に閑靜なる一室を造つて、心に任かせて讀書念佛し、實に平和な靜かな晩年を送られた。先生は獨立自尊の精神に富み、常に其弟子に向つて、余は生涯決して他人の厄介にはならぬと申されたが、果し

て常の言の如く、生涯を終られたといふことである。其命終の時などは、既に一ケ月程前から、床の間には三尊の來迎佛を掛け、窃かに覺悟をされてあつた。其の命終の前日には、頭を剃つて風呂に入り、其の翌日の午後三時頃、炬燵の中で念佛を稱へながら、眠るが如くに往生なさつたといふ事である。此は大正十年の十一月の二十日であつた。歿後管長猊下より、其の功績を表彰して大僧正の號を贈られた。先生は常に質素を旨とし、着るには多く綿服を用ひ、老に至るまで桐下駄を穿かず、粗食麁菜に甘んじて、信施の恐るべきことを繰りかへされた。誠に佛の敎に適ふ、意義ある生活であつたと言はねばならぬ。されば先生の生涯は實に高潔といふ二字が、最もふさはしいと思ふ。戒名は莊蓮社嚴譽上人功阿護法義城大和尙といふことも一言諸君に紹介して置く。

思ひ出した事ども

石橋誠通

吾々のクラスが天台の研究に趣味をもつたのは蓋し東京時代であらふ、宗敎大學がまだ巢鴨に移らない已前、あの小石川の豚小屋時代、卽ち姉崎さんからはマッチボックスと輕蔑せられた昔の本校の遺物、其後高等學院とか宗敎大學院とか、宗敎大學と